令和6年度第2回茅ヶ崎市文化生涯学習プラン推進委員会会議録

議題	1　茅ヶ崎市文化生涯学習プランの評価方法について 2　茅ヶ崎市文化生涯学習プラン施策に基づき実施した各施設の事業について 3　その他
日時	令和7年3月27日（木）　午後2時から午後3時45分まで
場所	茅ヶ崎市役所　本庁舎4階　会議室3
出席者	野田邦弘委員長、山口理紗子副委員長、森井健太郎委員、野田穂委員、 栗林大空委員、岩本一夫委員、沼上純子委員、荒川融委員、 井上由佳委員 （欠席委員） 青木幸美委員、渡邊哲也委員、西澤秀行委員、入江観委員、 伊藤隆治委員 （事務局） 大竹文化スポーツ部長、菊池文化推進課長、井上課長補佐、 豊原課長補佐、大久保課長補佐、田中主査、篠崎主事
会議資料	次第 資料1　茅ヶ崎市文化生涯学習プラン評価方法について 資料2　茅ヶ崎市文化生涯学習プラン評価シート 資料3-1　文化芸術教育プログラム事業 資料 3-2　茅ヶ崎ゆかりの人物館研究室（ゆかりラボ）事業について
会議の公開・非公開	公開
非公開の理由	―
傍聴者数	3人

1　開会

〇事務局（菊池課長）

皆様、こんにちは。文化推進課長の菊地です。

本日は、お忙しい中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

ただ今より、令和 6 年度第 2 回茅ヶ崎市文化生涯学習プラン推進委員会を開始します。

本日は、青木委員、渡邊委員、西澤委員、入江委員、伊藤委員の5名の方が御欠席です。なお、山口副委員長、栗林委員におかれましては、遅参の旨の御連絡を受けていますので、御到着次第、参加される予定です。

また、この会議は公開で、本日の傍聴人は、3名です。

それでは、議事進行は、茅ヶ崎市文化生涯学習プラン推進委員会規則第5条第1項により、野田委員長にお願いします。

2　議題

〇野田委員長

それでは、会議を始めます。

今日は第 2 回ということですが、令和 6 年度の最後の会議ですので、評価について、皆様の忌憚ない御意見をいただきたいと思います。

（1）茅ヶ崎市文化生涯学習プランの評価方法について

議題(1)「茅ヶ崎市文化生涯学習プランの評価方法について」、再度確認をしておきたいと思いますので、事務局の方から説明お願いします。

〇事務局（井上課長補佐）

文化推進課井上から説明します。

資料1と資料2を御覧ください。内容については、前回と同じものですので、変更点のみ申し上げます。

資料1ですが、これまでは「評価指標」としていましたが、「評価方法」と変更しました。「3　中間評価の手法について」の下線部を御覧いただきますと、指標につきましては、プラン 36～37 ページにありますように、市民意識調査を指標とすることで、既に決定していますので、誤解を与えてしまう可能性があり、今回決めていただくのは、あくまで評価の方法のため、「方法」という表現に変更しました。その他は、単年度評価として、まず行政評価を行い、それに基づき諮問し、本委員会で評価していただいき、答申をいただくという流れです。スケジュールは、記載のとおりです。

なお、中間評価は令和 8 年度、期末評価は令和11年度を予定しています。単年度評価に加え、基本目標の達成度を確認する指標として、市民意識調査結果を活用し、評価を行います。

○野田委員長

ありがとうございました。ただ今、変更点を中心に、評価方法の説明がありました。この考え方や方法に基づき、今後各文化施設の評価を行うことになると思います。内容について、御不明な点や御意見等がありましたら、どうぞ。ございませんでしょうか。もしありましたら、また後程お出しください。

（2）茅ヶ崎市文化生涯学習プラン施策に基づき実施した各施設の事業について

○野田委員長

それでは、議題(2)に移ります。各施設の事業についての報告です。事務局より説明をお願いします。

○事務局（大久保課長補佐）

事務局より説明します。

本委員会につきましては、令和2年度をもって廃止した茅ヶ崎市ゆかりの人物館運営委員会及び令和3年度をもって廃止した茅ヶ崎市美術館運営委員会を統合し、現在に至った経緯があり、委員の皆様から、ゆかりの人物館及び美術館の状況について、本委員会での報告を求められてきました。実際、令和5年度は、プランの作成について、皆様に協議いただきましたが、今年度以降は、事業の評価ということが始まります。美術館やゆかりの人物館の運営状況を説明し、評価をしていただくことになるのですが、この間のまで説明できていなかったということもありまして、今回、説明させていただく次第です。

それでは、資料３－1及び３－２を用いて、プランの施策に基づき実施した両施設の事業を報告します。

○事務局（豊原課長補佐）

それでは、まず、議題（2）「ア　美術館・市民文化会館・松籟庵」がプランに基づき実施した事業の取組について説明します。

プランに位置付ける施策2「未来をつくる市民の育成と活動支援」を推進するため、令和5年度から美術館、文化会館及び松籟庵にて、文化芸術教育プログラム事業を実施しています。お手元の資料3―1「事業の目的」を御覧ください。次代を担う子どもたちの豊かな感受性を養い、創造性を育むため、子どもたちが文化芸術に直に触れる機会をつくり、あわせて小・中学校を中心とした教職員等が教育活動に文化芸術を取り入れる支援を目的に、美術館、市民文化会館、松籟庵がそれぞれの特性を活かし、事業に取り組んでいます。各施設の取組事業に、小・中学校の児童・生徒を中心とした子どもたちに参加してもらいました。小・中学校で開催実績は、令和6年度は、11校、約1，200人の参加（見込）です。

来年度も実施を予定していますが、特に美術館につきましては、事業の実施を通じ、子どもたちが美術館に足を運びたくなる工夫が必要であるという課題が出ていますので、展示会期とリンクし

た学芸員によるアウトリーチ事業等の実施を考えています。

〇野田委員長

美術館、市民会館、松籟庵について説明がありました。委員の皆様から、今の説明について、御質問や御意見いただきたいと思います。

〇岩本委員

文化推進課がこういう事業をやっていこうと、要するにプランに沿った事業をやろうと提案しているのか、あるいは財団が企画したものを見て、それに指導なり意見なりをしていくのか、その辺のすり合わせはどうなっていますか。どちらがリーダーシップを取ってやっていくのかということです。

〇事務局（豊原課長補佐）

どのようなものを実際に実施するのかということについては、財団と話を詰めており、実現可能なものの提案に対し、こういう形で実施してほしいと伝え、決めています。実際に学校にアプローチするものは、なかなか財団だけでは難しいので、市も一緒に教育委員会等に諮っています。

〇岩本委員

そのすり合わせを緻密にやらないと。こういうプランがあるということは、財団も把握しているでしょうけど、じっくり読んでいるかどうかはわかんないですよ。財団もトータルで意識の疎通ができているかどうかは非常に疑問だと思います。僕も財団の理事もやっているので、その辺りの雰囲気がわかっているんです。なかなか、文化推進課が作ったプランの精神のようなものが、財団だけではなく、文化芸術あるいは生涯学習の企画をやっている部署に、多分浸透していないのではないのかな。何となく、それっぽい事業があると、これは生涯学習っぽいから、ここのプランの中で実施したことにしようみたいなことになりかねないのかな。

多少のすり合わせはしているようですけど、具体的にこういうものをやってくださいとか。例えば、小学校で年に５回やってくださいとか、10 回やってくださいとか、財団ではやりたくてもなかなかできないんですよ。さっき仰ったように、学校が受け入れてくれない。忙しいからやっていられないんだよね。現実問題、そういう壁をどうやって取っ払っていったらいいのかなっていうのは、とても課題だと思うんですね。それは、プランの冊子を財団に渡した程度のすり合わせでは、全然先に進まない。じっくりこれをどうするかって。

ここに、校長会の先生がいらっしゃる訳だから、そういう人も入れて、どうすれば実現できるか。各学年、年に1回ぐらい何かをやりましたでは、効果が出ましたってなかなか言いづらいでしょう。効果が出るまで、出るようになるまでには、どれだけやったらいいのか。それには、どういう人にその協力を得たらいいのか。アウトリーチだって、普通にやればお金かかる話だから、安い経費で、民間のパワーを生かしなが

ら。ボランティアで演奏したり、講習をやってくれる人っているわけですから、そういう人を引き込みながら、中身の充実を図っていくべきだろうなと思うんですね。

○野田委員長

文化推進課でお答えいただきたいと思います。

○事務局（豊原課長補佐）

まず、すり合わせについてですが、令和５年度の実施状況では、やはり教育現場において、なかなか受け入れてもらえず、実施できなかったり、想定の回数を実施できなかったという課題がありましたので、令和6年度は、教育センター等に協力を依頼し、どうして取り入れてもらえないのか、どうすれば取り入れてもらえるのかという相談をしました。教育委員会、小学校、中学校、茅小研、茅中研、それぞれに部会がありますので、その部会で活用してもらう形が一番教員に受け入れられやすいのではないかという助言を受けました。そのようにするには、どうすれば良いのか、部会の部会長の学校長に話を聞き、より細かく教員に響くような資料を作成し、4月2日の小学校長会において改めて紹介してもらう予定です。これはもう何回も教員にアプローチするしかないと考えており、どうすれば教員に響くか、1回打って反応を見て、ということを繰り返してやっていかなければならないと思っています。

それから、ニーズについては、やはり、教育センターから話を聞く中で、デジタルアーカイブを美術館で設けているのですが、学校では逆にタブレットの活用、つまり、電子媒体を活用した教育がなかなか進んでいないという課題がわかりました。こちらで用意するものをいかに活用してもらうか、また、活用が難しいタブレットをいかに活用して、文化芸術教育プログラムを実施してもらうか、形を変えながら、令和6年度、7年度は模索することを考えています。また、財団職員とも打ち合わせをして決めていますので、仰ったように、細目に連携を取り、教育センター等に共に話を聞きながら、引き続き進めていきます。

○岩本委員

とても良いことだから、どんどん進めて欲しいんですがね。実は、こんなことはもう20年も30年も前にやるべきだったんですよね。今まで何をやっていたのっていう、同じような質問をいろんなところでしたことがあるんすけど、役所はやってるって言うんすよ。でも、全然何をやっているんだか。頑張ってはいるんだろうけど、形になって見えてこないで、学校の協力なんかも未だになかなか得られない、文化祭のチラシを持って行っても貼ってもらえない。財団のチラシの中にも、子どもたちを対象にしたワークショップ等たくさんありますけどね、参加者はすごく少ないですよね。30人集めたいところに、10人しかいないとかね。よっぽど目玉になるようなものがないと。そう言うと、それは経費のかかる話ですから、なかなかできないでしょ。この間は教員を対象にしたイベントだったのに、参加者がゼロだったっていうのがありましたよね、美術館でね。そういうこともあって、企画が悪かったのか、教員に何が受けなかったのかわからないけれども、参加者がゼロでしたっていうのはね、かなり反省の余地あるなって思います。財団の企画でうまくいき

ませんでしたではなくて、やっぱり文化推進課と共同で、歩調を合わせて、何で駄目なのかねと。

文化推進課、つまり市長部局で何か手立てはないんだろうかね。あるいは、教育委員会に相談したら、うまくいくかもしれないよね。そういう先の見えるトンネルを作って欲しいんだよね。今までそういうことがなかなかないんだよね。若い職員さんが中心になってね、トップにそんなの無理だよって言われても、「いや、やってみてください。」って、どんどんやってくとかね、なんか新しいここ構造を作らないと。気持ちはわかるけどね、頑張っていますっていうのはわかるんだけど、何か空振りに終わっちゃう。その辺、どうするんですか。聞いてもしょうがないんで、僕も言いっ放しにしておきますけど、ぜひ御尽力と、それからいろんな関係するところに片端から協力を仰いでいって、これやらせてくれと直談判すると、意外と上手くいっちゃったりするものだからね。

学校でも、なかなか今、民間の協力を得る体制ができていないでしょ。クラブ活動全部を外注するとか言いながら、なかなかそれが前に進まないですよね。一部でうちの先生に頼んだりとかね。ほんの一部ですよ、そういう外部の人が学校に行って、教員が活用するっていうことが、もう大分前に明文化されていながら、現実にはほとんど実施されていない。そういうことも含めて、非常に難しい問題だから、しっかりと取り組んでいただきたいとお願いします。

○事務局（大竹部長）

皆様、本日は御出席いただきまして、ありがとうございます。文化スポーツ部長の大竹です。

岩本委員から、大変貴重な御意見いただきまして、ありがとうございました。

やはり皆様と一緒に作り上げた文化生涯学習プランを推進し、いかに目指すべき姿に近づけるかが、我々に課せられた使命であり、それが仕事だと思っています。

学校で文化芸術の取組を進めていくには、相手の土俵に入らなくてはなりません。会議等でも話していますが、やはり忙しい教育現場です。新年度になって我々からいくらお願いしても、もう学校は、年間スケジュールが決まっています。それでは遅過ぎますが、教育現場で実施することは、間違いなく良いことであると実感してもらえる自負があります。担当者から説明しましたように、これまで話しに行っていなかったところに逆に話を持っていくには、どのような順序立てが良いか、教育現場からの意見等を参考に、積極的に足を運びたいと思います。また、どうしてやらなかった、できなかったのかということを聞くよりも、実施したところにおいて、やってみてどうだったかを聞き、他の学校にもぜひ広げ、取り組んでいこうと思っています。20年来なかなか動かなかったところで、なかなか一足飛びにはいかないかもしれませんけれども、一歩一歩確実に、目標の年次に向けて進めていきますので、皆様に取組を評価いただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

○野田委員長

この点について、他の委員からも御意見はありますか。

○沼上委員

まずはじめに、美術館の取組のところです。美術館のある場所は、南口から降りてまっすぐで、図書館があり、高砂緑地があり、そして美術館が松林の豊かなところを歩いて小高いところにあるという、まさに、すてきな文化の小道です。催しものも大事なんですが、まちづくりとして、そこに向かっていくときに、夢とロマンを感じてほしいなと思います。子どもたちやいろんな人が見たときに、わくわくするような、あの通りだけでいいからそんな感じにしていただき、図書館を過ぎて美術館に入る小高いところまで、ゆかりの人物に出てくるような人のクイズアンドアンサーみたいなものを置き、小道を楽しみながら美術館に向かう形なんかいいかなと思います。

美術館のこの取組、教員への取組とか、魅力的です。年間を通して、無料で小学生が鑑賞できる。ウェルカムプレゼントを使えば、ちょっと足が遠のいていた保護者や子育て中の人が、いろんな企画を通して美術館に趣く。初めて行く人も増えたり、いろんなところに広がっていく良いきっかけになるので、教員や保護者にとっても良いチャンスじゃないかなと思っています。

それから、市民文化会館の取組についてです。鑑賞型と体験型はとても良いと思います。特にワークショップがとても盛んで、年間通して、市民文化会館の入口は、すごく頑張っているなと思っています。入ったときに季節折々の飾りとか、茅ヶ崎の観光協会からきた品々も並んでいて、あそこに入ると茅ヶ崎を知るいい機会になっています。市民文化会館は駅に近く、いろんな人が使える展示室、大ホール、小ホール、練習室があります。幅広い人たちが文化だけじゃなく、スポーツとか、いろんな趣味、いろんなカルチャー、いろんな目的で使っていて、ハンディキャップのある人たちのニーズも叶えるよう、どんどん努力されていらっしゃるので、幅広いいろんな人たちが市民文化会館を使用しています。すごく駅に近いという立地を生かし、茅ヶ崎市のど真ん中にあるので、当然南北に住んでる人たちが使いやすく、行きやすいです。参加者が少なくても、めげずにもう1回打つとか、あらゆる層に訴えかける企画とか内容を考えて、取り組んでいけるんじゃないかなと思います。

先だっても茅ヶ崎で初公演の、金沢の復興支援のオーケストラに呼ばれて、私も行ってきました。本当にすばらしい企画を、市民文化会館はやっているなと思いました。

それから、小学校6年が劇団四季の公演を鑑賞する体験なんですが、これは本当に保護者も喜んでいます。教員も児童も、6年生になったら、テレビの世界じゃなく、市民文化会館に行って、生で劇団四季を観られる。機会がなければ、一生に行かない人もいるかもしれないのに、同級生とみんなで行く。しかも、同じものを観ても、感想が違う。感じ方ってみんな違うんだっていうことを、みんなで観ることで気が付く機会を、小学生のうちに体験できることは、すばらしいなと思っています。これからもいろんな市民にとって近い美術館や市民文化会館であってほしいと思います。よろしくお願いします。

○野田委員長

今のは、意見ということでよろしいですか。

○沼上委員

はい。

○荒川委員

中学校から出ている荒川と申します。円蔵中学校に勤めています。今お話しいただいたプログラム授業のことですと、「先生たちのための10日間」に参加した本校の美術科教諭がおります。美術館で昨年ミュシャ展があったと思うんですけど、年度が替わってからですが、年間の教育課程の中に入れ、鑑賞の授業として1時間行いました。生徒も美術館に行けば、これを鑑賞できるよという形で授業を締めくくる取組でした。

それから、松籟庵ですけど、本校の部活動には、茶道部がありまして、毎年夏休みに部屋を借りて、普段は教室でやっている茶道の活動を、その日は松籟庵で浴衣を着てやるという取組をやっています。場を提供していただけることが、しかも、お金もかからない形でやらせてもらえているので、本当にありがたいなと思っております。

ただ、学校教育活動の 1,015 時間の中に、全9教科と、それから特別活動、道徳も含めて、全部をつぎ込む形になっていますので、新しいものになかなか時間を割くのが難しいという現状があります。土日は、学校教育活動の範囲外になりますので、もし土日のプログラムに参加するようになると、勤務条件として、どうしてもその教員が代休を取るとことが非常に難しいです。土日、生徒を引率して美術館なり、社会教育活動のイベントに出るとなると、引率教員が、その後、日中平日に代休を取るということになります。授業の時間割で、そこが空いてしまうことを解決できれば、きっと土日振替の中での社会教育活動への中学生の参加が可能になるのかと思います。こうしたら良いというのは、本当に思い付かなくて。現状ですけれども、そういう難しさがあると思っています。

○野田委員長

ありがとうございました。余談ですけど、私も大学で教えていました。学生の進路指導なんかの相談を受けたり、そういう時間帯がありました。はっきり言いますと、教員の働く教育現場は、ブラック企業です。ですから、教員になりたいっていう若者が、どんどん減っている状況です。教育学部だったんですけどね。なぜそうなるかっていうと、休みもなく、超勤。今は、実は手当、つまり、残業代がない代わりに、一律で月額の4％を上乗せしているんだけれども、それも大した額にはなっていないっていうことと、責任がすごく大きすぎるということがあるので、アウトリーチをやろうという立場にいながらですね、現場のことに大変同情するところです。政治から変えていくしかないっていうことと、今は少子化ですから、おそらく本音では、そのうちどうにかなるだろうと思っているのでしょうが、そういうことではなくてクリエイターシティを目指す茅ヶ崎だったらですね、教育って最後の胆ですから、ぜひ乗り越えていくことが眼目の一つかなと思います。今、世界で学校依存社会っていう投資をしています。今の学校の現状がよくわかりますから、参考にしていただければと思います。

いろんな意味で、ないっていうことでやってきたんだけど、これから先ですね、AI が入ってきたり、事務がかなり変わっていくはずなので、そういったことを踏まえて技術教育をどうするかっていうことも、本当に大事なんだろうなと思いますので、ここの委員会には、学校代表で小学校・中学校の先生にも入っていただいていますので、そういった変容ができると期待して、既成の制度がどうかとか、法律がどうかとかいうことではなく、ぜひ子どもの立場で考え、そういう立場で議論できたら良いと思います。

○井上委員

御報告ありがとうございました。私も10年以上前から茅ヶ崎市美術館と仕事を通して関わってきたのですけれども、市民文化会館も、松籟庵も、非常に手厚く、様々なプログラムをされていて、また新たなアプローチも取られているんだなということがよくわかりました。そこは、本当に評価させていただきたいと思いました。

まず、美術館の取組で言えば、すごく丁寧に学校へのアプローチをされているということで、先ほど、教育センターとの連携のお話を伺いましたが、逆にちょっと学校に重きを置き過ぎてしまってるのかなという気もしなくもありません。というのは、子どもたちを思い浮かべるとき、子どもが集まっている「集団」っていうと、もちろん学校なんですけれども、先ほど先生もおっしゃったとおり、もう本当に今の日本の小中高校は、とにかくいっぱいいっぱい。でも、何か新しいフレーズが出てきたら、それもまた学校でやるんですかってなる。皆お腹いっぱいな状況なんですよね。なので、新たなものを持って行ってこんなに良いんですよと言っても、やりたくても、もう人も時間もないっていうのが現実だと、本当そう思うんです。でも、子どもが集まっていて、比較的自由に時間が取れていて、むしろコンテンツに飢えているというか、もっと欲しいなと思っている人たちもいるんですね。例えば、市内の学童クラブ、児童クラブ、学童保育。平日は、短時間利用なんですけれども、長期休暇中は子どもたちが朝から夕方まで結構な人数が集まっています。残念ながら、学童保育は保育園や幼稚園ほど広い空間で伸び伸びと過ごせる環境にないところも多いですから、ぜひ、そういうところから来てもらったり、あるいは何かしらのパッケージを組んで、貸し出して、美術館でこんなことできるんだよという誘いになるようなワークショップをやってもらうとか。子どもたちが集まる場所は、学校以外にもたくさんあるので、そういった形でアプローチされてはいかがでしょうか。スポーツクラブでもイベントをやっているので、年に何回かそういったイベントの行き先として、市内の文化施設も候補に入れてもらうのはいかがでしょうか。こんな選択肢が出てくると良いんじゃないかなと思っています。

他に、今、市内では、中央公園のさくら祭りみたいに、いろんなことをやっているんですかね。そういったフェスティバルとか、イベントとか、美術館、市民会館とか、そういうところに、ブースを出して、自分達の普段持っている魅力あるワークショップをそこでやってしまう等、出前として、いろんな人が来る所にあえて出て行き、見てもらって、実感してもらう、楽しいからぜひ来てくださいっていうことをやっていくっていうことが、薄く広くかもしれませんが、ある意味、新しい人を呼び込むきっかけにはなると思うので、ぜひそういった形もやっていただけると良いのかなと思いました。

あと、市民文化会館の取組の「いこいの場プロジェクト」等も、よく自習室として会議室を開放しているというチラシを拝見していて、良い試みだなと思っているんですけれども、そういう場を引き続きやっていただきたいと思います。やっぱり、茅ヶ崎は若者にも優しいよというメッセージにもなっていくと思いますので、今後のさらなる飛躍に期待したいと思います。

○岩本委員

先ほどの荒川先生のお話を聞いてるとね、まさにそのとおりで、僕らも学校に話をしていきたいねって言っても、「いや、いや、悪い迷惑になるからやめようよ」ってやめちゃうんですよ。すごく忙しいのは、よくわかっているんでね。その忙しい中、例えば、国や県から、アンケート調査みたいなものが学校宛で来るでしょ。それ、年間何本ぐらい来ていますか。

○荒川委員

学校宛の調査というのは、どのような調査でしょうか。

○岩本委員

文科省だけじゃなくて、いろんなところから来るでしょ。議員がこういうデータを欲しがっているからみたいな。僕が聞いたら、ある学校ではね、年間 380 本くらいあるって。だから、教頭先生がそれにもうずっと追われていて、その調査書の管理担当者みたいになっちゃっていると。それは、オーバーな話なのかもしれないけど、かなりの量の調査書が学校に届いているようなんですよね。それで、僕はそんなの全部蹴っちゃえって言ってんの。

それと、職員室。日本だけですよ、職員室みたいな部屋があるのは。しかも、向かい合わせでこっちで内緒話は絶対できないよね。電話していても、向かいの人も電話しているし、全部筒抜け。あれが、例えば、全部壁向きになってるとか、壁向きになっていて、仕切りでもあれば、ちょっと内緒話できるんだけど、あんなだだっ広いところに、児童を呼んで、話をしても、全部周りに聞こえちゃうんだよね。児童と内緒話もできないから、そういうときは、ちょっと別の部屋にいらっしゃいって言われちゃうと、何で職員数じゃなくて、別なんだろうって、また変な気持ちにもなるしね。アメリカはないでしょ、職員室って。教員は個人の部屋ですよ。大学みたいに。給食の時間は、給食の担当を民間の方にお願いしているんだよね。教員は、勝手に 1 人でご飯食べに行って、一息つけると。日本は教員が生徒と一緒にご飯食べなくちゃいけないから、休みがないんだよね。そういうことも含めて、もっと働き方改革のように、改革しなくちゃいけないところはうんとあると思うんですよ。やろうと思えばできることもあると思う。うちの学校はこうしますよって。校長先生は、大変だろうけどね。

○荒川委員

お話があった職員室ですけれど、今、生徒は、茅ヶ崎の公立中学校だとほとんど年間を通して、入室は

させないっていうのが基本になっていますね。職員室の教員の所に行って、何か話す機会は、今取れないですね。どこか別の相談室みたいな部屋で、教員と生徒が話すような状況になっていますね。理由としては、個人情報の保護とか、そういうことで職員室に生徒を入れないことが一般的になってきていて。本当に寂しい話なんですけれども、そんな現状があります。

〇岩本委員

だから、職員室をなくしちゃえば良いんですよ。だって職員室がある必要ってないじゃないですか。打ち合わせをするんだったら、談話室で打ち合わせすれば良いんです。

〇荒川委員

そうですね。談話室みたいな部屋が、たくさんあると良いんですけど。

〇岩本委員

たくさんなくちゃいけないんですよ。校長室しかないでしょ、談話室って言ったら。応接室みたいな。そういうところから改革をしていかないと、教員も自由にならない、生徒も自由にならない。それと、政治家がね、5時過ぎて、料亭で打合せしているって、働き方改革違反だよね。あれ、絶対職員が付いていかなくちゃいけないんだから。もう、とにかく、政治家からしてね、ルール違反やっているわけだけど。いや、そういう人たちが率先して世の中を変えていかないと、変わっていかないよね。僕は、ねらいは、5時になったら、教員は子どもと一緒で学校の門を出ろ。そうあるべきですよ。難しいだろうけど。

〇野田委員長

よろしいですか。教育議論はいつまでも終わらないという特徴があるので。

〇森井委員

先ほどの荒川先生の「先生たちのための10日間」のお話、美術館に教員が行って、ミュシャ展を見て、それをまた教室に転化して、子どもたちにお話をして、見せていくという話ですが、すばらしい流れだと思うんです。それで、令和6年度に「先生たちのための10日間」に、何名ぐらいの教員が実際に参加をしたかという数字を事務局にお聞かせ願いたいです。それから、「先生たちに向けたギャラリーツアー」の参加者数と相談件数も教えてください。あと、「先生応援アートプログラム」は、芸術のリアル体験から子どもたちの理解者になっていくということなんですけれども、これにつきましても、どういった創造活動の場に教員が実際にアプローチをして、その機会を終えるか、具体的な手法と数を教えていただきたいんです。

〇事務局（豊原課長補佐）

「先生たちのための10日間」は、確認します。「先生たちに向けたギャラリーツアー」は、13 人でした。相談件数というのは、実際には実現しなかったけれども、お話があったものということでよろしいでしょうか。「先生応援アートプログラム」につきましては、1回実施をしました。3月21日に落語家を招待して、小学校教員21人に参加してもらいました。結果報告は、まだ受け取っていないので、今後提示します。

○森井委員

わかりました。この「先生」というのは、美術科の教員に限らず、保育園、小・中学校の全体ということでしょうか。

○事務局（豊原課長補佐）

小・中学校、保育園、それから学童で、「先生」という呼ばれ方の全てを受け入れています。

○森井委員

参加者数は後で教えていただければと思うんですけれども、例えば美術科ではない、理科や数学科の教員が、美術館に足を運んで、美術作品を見てもらうというところから、クリエイティビティなり、そこからインスパイアされたもの、アートを、直接的には展開できないかもしれないけど、授業や子どもの情操教育に対して、少しアートを入れられるようなことを目的に、プログラムを実施されていると考えてよろしいですよね。

○事務局（豊原課長補佐）

どういう形で創造性が発揮されるかわかりませんので、全教科の先生に受けていただきたいと思います。

○森井委員

わかりました。それはすごく良いと思うんですけれども、単純に10日間、教員はただで展示を見れるよということではなくて、やはりプログラムを活用する教員が、自分が美術館にアプローチする目的とか意味をある程度理解していただくよう、やはり前段階のところで、なぜ皆さんが10日間が見られるのかということを、教員にしっかりわかってもらう、意付け、動機付けが重要になってくるのかなと思いました。

○事務局（豊原課長補佐）

ありがとうございます。事前に教員に配付する資料等で、どのような体験ができるのかイメージできるように努めていきます。

○沼上委員

資料３－１の「1　事業の目的」に掲載の図で、子ども（学校外）、児童生徒（学校）という分類があるんですけど、ここで見てわかるように、今教員が本当に時間の余裕がない中で、やっぱり児童・生徒と関われる時間、そこで共有できるもの、培うもの、一緒に取り組めるものを文化芸術教育プログラムに含められたら、本当にすばらしいと思います。学校でみんなでやるのとはまた違って、家に帰って、学校外で子ども一人ひとりが自分の好きなこととか、生活の中で興味があるものを見つけて、親子で参加したり、自分の考えや感性で判断して、参加できる企画が、文化会館あるいは美術館にあって、地域や学校外でのいろんなチャンスがどんどん増えていったら本当に嬉しいと思います。

茅ヶ崎は、御存知のように、地域に、複合施設とか公民館のような箱ものは、確かにあります。でも、文化会館みたいに、お金かけて企画するところはないんですね。自分たちで、地域の力で企画するものはあるんですが、もっと自分たちではできないことができるっていうのが、文化会館や美術館なんじゃないかなって思うんです。地域でボランティアでいろんな企画をやったり、そこに参加するというのもすごくいいんですけれど、駅近くにあって、魅力があって、夢があって、わくわくするようなものを、これからも続けて、茅ヶ崎が好き、茅ヶ崎を愛するクリエイターが育っていけば、それはすごくいいと思います。そういう環境づくりと、心と感性を育てるものを、これからもすごく期待しています。よろしくお願いします。

○野田委員長

皆さんから出てくるのは、すごく前向きで、未来志向型の御提案を含む御意見だったと思います。ぜひ取り組んでいただいて、できることに限りはあると思いますが、これからどういうふうに持っていこうかって、前向きに取り組んでいただければと思っています。

それでは、次のゆかりの人物館の事業に移りたいと思います。事務局から説明をお願いします。

○事務局（大久保課長補佐）

それでは、プランに関連したゆかりの人物館の事業について説明します。

ゆかりの人物館は、平成27年2月のプレオープン以降、前期・後期の半年ごとの企画展を開催してきました。また、文化生涯学習プランの施策3「文化資源の継承」を推進する事業として、茅ヶ崎ゆかりの人物館事業における「ゆかりラボ」という事業を位置付けています。ゆかりラボは、令和3年度から取組を始め、1年以上の期間をかけて、茅ヶ崎の貴重な文化資源である「人」に焦点を当てた調査や研究、収集、整理、保存を市民の方々とともに進める事業です。アドバイザーや学芸員の講義を受け、研究方法を学んでいただきながら、研究や発表を行います。事業を実施することで、持続可能なまちづくりに寄与する文化・歴史・風土を次代へ継承することや、担い手となる人材を育むための学びの機会を創出することを推進しています。これまで「南湖院」、「映画史」、「関東大震災」、「茅ヶ崎純水館」、「大岡越前守」をテーマとする5つのラボを実施し、各ラボには、10人程度の固い御参加をいただき、好評を得ました。「関東大震災」以外のラボは、ゆかりの人物館の企画展と連動して行っていたため、企画展の開催中に研究成果を展示発表しました。

また、朗読会等、ラボの参加者が企画する企画展関連イベントも多数開催し、来館者の増加にもつながっています。令和３年度から６年度半ばまでのゆかりの人物館の企画展の開催状況、来館者数を資料に記載しておりますので、どうぞ御覧ください。

○野田委員長

ただ今のゆかりの人物館事業に関する報告について、何か御質問、御意見、コメント等はありますか。

○岩本委員

以前、美術館とゆかりの人物館の審議会がなくなって、この会と合併をするんだと聞いて、僕は、合併したんだったら何でここの場で美術館とゆかりの人物館の審議会がやっていたような議題が出てこないんですかっていう質問をしたわけですよ。報告をすればいいっていうものじゃなくて、もちろん報告もこういう会だからしてもらったら、皆様も「なるほどね、こんなことやってたのか。」ってなるだろうけど、僕が言っいるのは、そういうことではないんだよね。例えば、ここに大岡越前だとかタイトルが載ってるけど、これは誰が決めたんですか。昔だったら、ゆかりの審議会が何をしましょうって、みんなで相談して決めていたんだよね。最近は、こういったことは、どこで決めているんですか。

○事務局（大久保課長補佐）

現在、ゆかりの人物館は、専門家に運営アドバイザーを委嘱していまして、その方たちと相談し、できること等を検討し、決定しているという流れです。

○岩本委員

美術館についてはね、財団の理事会、協議会でいろいろな意見を出す場があるから、結構議論しているんだけれども、ゆかりの人物館については、審議会がなくなっちゃったんで、多分一般の方が意見を言う場がないんじゃないのかな。その専門家を交えてっていうのは、どうしたらいいんだろうねっていう相談を多分しているんだろうと思うけど、その専門家って茅ヶ崎に詳しい人ですか。

○事務局（大久保課長補佐）

そうです。以前、茅ヶ崎市にお住まいでいらっしゃった大学教授の方で、今は茅ヶ崎を離れてしまったんですが、開館の時から携わっていただいて、博物館学を主に研究している方を中心としています。

○岩本委員

「大学教授」とか出てくるんだけど、大学教授が茅ヶ崎のことに詳しいかっていうと、そうでもなかったりしてね。忙しくて、茅ヶ崎にあんまりいないんだよね。朝早く出て、夜遅く帰ってくるっていうのが、大体大学教授なんだけど、そういう人たちが、果たしてどこまで、茅ヶ崎のゆかりの人物にはどんな人がいて、何

をどうしてきたのかっていうことを詳しく学習していらっしゃるかは、ちょっと疑問なんだよね。

例えば、映画の話だったら、映画をやっている人がいるし。僕もそうなんだけど。松竹で仕事してたんですよ。そういう、元松竹のカメラマンだったって人もいるしね。そういう人から直接話を聞くのは、大学教授から話を聞くより、はるかに松竹のことはわかるわけですよ。あと、松竹の敷地のどこに何があったかって、僕らわかるわけね。今にかけてどんな建物があって、それがどんな、どんなふうに映画文化に寄与していたかみたいな話も、松竹で仕事した人であればわかるわけじゃない。客観的に松竹ってあったんだよねっていうだけで、僕が今考えているのは、どんな人が近いところに住んでいただろうね、ということ。松竹関係で、実はすごく多いんですよ。監督も。小津さんなんか茅ヶ崎に住んでないからね。住んでいた映画監督もいるし、照明の監督もいるし、いろんな人に近いんですね。でも、そういう人のデータベースもないんだよね。そういうのを、一体誰が作るんだろうねって言って、この間、美術カメラマンやっていた人たちと、我々が生きているうちに何とかしなくちゃいけないんじゃないかっていう話をしていたんだけど、なかなか民間でやろうねっ言っても、前に進まないんでね。そういうことも含めてね、民間のプロをもっと集めたらいいと思うんですね。例えば、そのラボなんかやると、そういう人たちが集まってくると思うので、そういう人たちに相談をしたほうがね、茅ヶ崎っぽいミーハーでないものが出てくると思いますよ。

○事務局（大久保課長補佐）

ありがとうございました。たまたまですが、今回のゆかりラボについては、もともとカメラをやっていらした方が参加してくださって、一緒に調査・研究に出向き、発表にも御協力いただき、カメラの物品を拝借して展示したり、講演会を行っていただいたりしました。今回の展示に関しては、３～４人名程度のグループに分かれて、小津・野田両氏の日記をひも解くグループ、小津氏がカレーをすき焼きにかけて食べるという話を再現したグループ、どんなものを食べたいか日記から調べてみたグループがありました。まさに、専門的知識ある方と、そうでない方がともに、すごく充実した内容の展示ができたと考えています。岩本委員が仰ったように、さらにいろいろな方に加わっていただく形がうまく作れれば、より充実した内容になると認識しています。

○野田委員長

聞いていると、大船撮影所があったことを結構若い人がちゃんと知らないんじゃないかなと思いますね。もうそれ自体が「歴史」に入ってきているので。きちんと基礎的なことを集めていくっていうことは、大事なことかなと思いました。

○沼上委員

この研究室、ラボシリーズ、そういうことあったんだなと思いました。前にも言ったことがあるんですが、南側に、ゆかりから南湖院まで文化の遺跡が残っています。それがラインじゃなくって、一つのモデル地区のように、文化ロードっていうか、芸術ロードみたいな感じで、道の名前を付けたり、看板を付ける等、何

か良い方法で、自然に触れるような環境づくりをお願いしたいです。興味のない人もそこを通ったら、「そうなんだ。この近くにこういうのがあるんだ。」を気が付くような。

純水館は、ここ5年ですよね、これが茅ヶ崎にあったって、広く知られるようになったのは。まだまだ歴史、・文化を発掘できるんだと思ったので、純水館には、とても驚きました。この記事がタウンニュースに載ったときに、今この時期にこういうものを見つけたんだって、多分多くの市民が驚いたと思うんですね。これからもそういうことがあるかもしれないので、その後保存とかいろんなことをやって、いろんな意味で、茅ヶ崎発掘みたいなことを継続的に進めたほうが良いなというふうに思います。

それとゆかりの人物で登録されている人って、100人ちょっとですよね。ゆかりの人物に名前を掲載したいと言って市民から集めた時に、100人ぐらい名前が上がったって聞いているんですけどね。150か。その中で厳選して、100何人まで絞り込んだとかっていう説、噂かしら、があるけれども、実際には、もっと多くの名前が挙がって、その中で精査されて、今になったっていうんですけどね。私、この平成27年2月のゆかりの人物のオープンの時、行きました。寒い中、外でもう凍えながらイベント見ましたよ。で、これだけね、ゆかりの人物がたくさん茅ヶ崎の中にいたわけですよね。だから、まだ埋もれているけど、出てくる人って、きっとこれからもいると思うので、これで終わりじゃなくて、現在進行形で、ゆかりの人物館を通して、人物発見とか地域発見とかを行って、発見したら、新聞とか広報だと消えちゃうんだけど、さらにそれが多くの市民にすぐわかるような、その場所に行くと文化のにおいがするような、何かそういうアプローチをしていただけたらと思います。

〇事務局（大久保課長補佐）

ありがとうございます。たくさん貴重な御意見をいただきました。いくつかお話します。例えば、南側の様々な文化資源を皆様に知っていただくのは、とても大事なことだと思っています。教育委員会の社会教育課所管事業の「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」では、まち歩きを行ったり、たくさんの文化資源について、新聞を作ったり、様々な形でお知らせをしています。やはりそちらがベースにあり、文化推進課の事業では、さらに人を育てていく趣旨もあります。ゆかりラボは、いろいろなやり方があって良いと思いますので、実現できるかはわかりませんが、市民の方に一緒にマップを作成していただくような取組や、ゆかりラボのあり方を検討する機会があると良いかと思いました。

また、ゆかりの人物についてですが、もともとは、確か、1，000～2，000くらいの候補がありました。その中から、336人に絞ったという経緯があったと聞いています。少なくとも、一度336人に絞っていることは、間違いないです。さらに、その中から、先ほど沼上委員がおっしゃったように、110人に絞られました。ただ、どの段階になるかはわからないですが、今後どこかの段階でそれを見直したり、追加していくことがあるだろうと思っています。ゆかりラボやゆかりの人物でアンケートを取っており、今後やってほしいことを書いてくれている方もいますので、今後も皆様の御意見を聞きながら、そして、いろいろな情報をいただきながら、より良い運営につなげていきたいと考えています。

○野田委員

ゆかりの人物館のラボに参加した御縁で、ここにいます。先ほどの美術館とか文化会館の事業とも関連すると思うんですけれども、今回ゆかりの人物館のラボに参加してみて、参加者の研究内容と展示の関係がすごく良かったテーマと、難しかったテーマがあり、差があったように感じています。例えば、文化会館とか美術館で、長年やってきて、市民によく知られているテーマと、ゆかりの人物館でうまくいったテーマやうまくいかなかったテーマの差は何かと考えたときに、スケジュールやどんな工程でやっているのかということや、協働がうまくいっていたかということ、そしてお金だと思うんですね。講師はもちろん年間を通して事業計画を立てられるので、急にこれをやりますと言われてもできないですし。ゆかりの人物館の場合は、テーマは決まっているかもしれないですが、それが年度の中で、どういう工程で、どのように展示まで持っていくのかという、ファシリテーターが不足しているかもしれないですね。もしかしたら、工程スケジュールがうまくいっていないかもしれません。

それから、講師と参加者のやりとりの中で、うまく協働で作り上げていくための立ち位置がわかりにくいことがあったり、うまく最後の展示に持っていけたという意識が違うので、協働というのは難しいのかなと思いました。

あとは予算なんですけれども、やっぱりお金がないと何も作れないと思うんです。今回の場合、最後にちょっと予算が足りなくてうまく展示物が作れなかったっていう話も聞いておりまして、予算の配分がどのようになっていたのか、それが難しくて、うまくいかなかったのか。お金があることがうまく進められるかどうかの差かなとも思うんですけれども、スケジュールと協働と予算の３点について、市はどのように改善していくか、何かお考えはありますか。

○事務局（大久保課長補佐）

ありがとうございます。ゆかりラボのお話でよろしいでしょうか。まず、スケジュールについてですが、本展示に合わせた企画展示を行う趣旨で御参加いただき、約1年程度をかけて、進めています。ただ、皆様の様々な御意見がある中で、どんなことやっていくか、当初の計画とは若干方向性が動いていくこともあります。先ほどの映画史ラボのように、やりたいことが分かれ、グループが生まれ進めていった事例もありますし、大岡ラボでは、全体で動いていきました。野田委員の仰るとおり、ファシリテーター、つまり、講師のコントロールや技量も大きな要素だと思います。今後もゆかりラボの各進捗段階で、うまくいっていることとうまくいっていないことについて、参加者の御意見を聞き、進め方を検討していきます。また、実際、今後のゆかりラボのあり方や運営については、ゆかりの人物館運営アドバイザーとともに話し合っていますし、先ほど展示テーマを誰が決めているのかという話もありましたが、現在そして過去にアドバイザーを務めていただいた方に相談しながら、ゆかりラボや関連展示の可能性について話しています。そういったことも含め、スケジュールをしっかり組み立て、本展示に沿った企画ができるよう取り組んでいきます。

そして、予算のことですが、多分、展示に使用する布製のロール紙が、本展示のほうで、数十センチメートルほど足りなかった件ですね。残りの布製ロール紙を使用して、ラボの参加者による関連展示も同様に

天井から布製ロール紙をぶら下げて展示を予定していましたが、本展示の最後の展示物でそれが足りなくなってしまいました。そこで、関連展示では、急遽、もっときれいに印刷できる写真用の用紙を使用し、パーテーションに掲示するという、少し形を変更して展示したことがあり、そのことを仰っているかと思います。この件は、たまたまそうなってしまったというところではありますが、基本的には、ゆかりラボは、成果物を作るところまでを想定して予算を要求し、進めていますので、今回に関しては、たまたま本展示と同じ素材を使おうとしたところ、在庫がなくなってしまい、急遽別の対応になったことを御理解いただきたくお願いします。

○野田委員

ありがとうございます。予算に関しては、成果物もそうなんですけれども、例えば、外部の講師に講演を依頼するということも難しかったと聞いています。ゆかりラボのことだけではないと思いますが、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟も目指していらっしゃいますよね、そういうことも含めると、やはりゴールを決めた上で、スケジュールをどう進めていくのか、具体的にメンバーできちんと共有して進められるようにしていかないと、浸透もしないし、うまくいかないし、達成感を皆で共有できない、共有するのが難しくなる気がするんですね。ですから、どんな事業でもそうですが、工程を含めて、長い目で見て、細かくどう具体的に描くかということを考えたほうが良いか思いました。例えば、何か出展するときに、どう効果的に予算を配分していくのか、あらかじめはっきりしておかないと、それに合わせて何ができて、何ができないかわからないと思うので。そういうところは、改善していただけたら良いかと思います。

○事務局（大久保課長補佐）

ありがとうございます。かしこまりました。

○井上委員

私もゆかりの人物館の、まだ準備段階のときに関わらせていただいて、1，000人リストを見た1人です。中には、なんだか、神社に腰かけた「何とかの神」の名前まで上がっていた記憶があります。そのくらいたくさんの名前が上がっていました。今のゆかりの人物館の活動を拝見して、こうしたラボ活動もやっていることは、非常にすごいなあと正直に思いました。すばらしい活動だと思うので。今、御指摘があったとおり、きちんと運営体制を整えて、続けていかれるのが良いかと思います。この資料に関しても言えるのですけれども、どのラボも基本的に終わっているものでしょうか。現在進行形のものはもうないですか。

○事務局（大久保課長補佐）

そうですね。現在は、全て終了しております。

○井上委員

終了しているんですね、それこそ、いつからいつまでやっていたか記載があると、もう少しとわかりやすかったかと思います。最後の成果の発表の年度だけの記載だったので、少しわかりづらかったです。調査結果についてですが、私も見に行きましたが、多目的館でパネル中心に展示していらっしゃったのが、調査結果の発表ということですよね。それをアーカイブ化したり、デジタルで記録を残すことはされていますか。

○事務局（大久保課長補佐）

現在、それを取りまとめてゆかりラボの参加者の皆様に配付する予定で作成を進めています。ただ、ちそれを、ホームページ等に掲載するというところまでは至っておりません。

○井上委員

理想は、やっぱり過去にどんなことがされたのか、どこまで到達したのかが、アーカイブ化されていて、そしてウェブサイト等からもクリックして PDF ファイルで見られるような形で記録を蓄積し、残していくことがすごく大事だと思いますし、後からテーマを持ってきてやろうとするときに、前の参加者は何をやったんだろうと知ることもまた、すごく大事だと思うので、そういう仕組みも含めて、必要な予算も付けていただけると、なおよろしいかと思いました。

○野田委員長

関連でちょっと質問です。丸博（ちがさき丸ごとふるさと発見博物館）はつながっていないんでしたっけ。あるいは位置付けが違うとか何か理由があるのでしたっけ。

○森井委員

丸博の運営部会長をしていますけれども、丸博でも結構意見がいろいろ出ますが、やはり少し縦というか、つながっていない感じはあります。関連している部分では、実際のところ、例えば、ゆかりの人物館運営アドバイザーの平山さんには、丸博で基礎講座をやる時の歴史の講師を担っていただいたり、おおもとの理念を作るときにも参加していただきました。あと、丸博友の会という基礎講座を卒業した100人以上の人たちで構成されているグループがあるのですけれども、ゆかりの人物館に勤めている方が、そこの会長されていて、活動が近いので、つながる部分はあります。でも、実際に両者が手を組んで何かをしようという形にはまだ至っていない状況ですので、それはやっていきたいなと我々も思っているとこです。

○事務局（大久保課長補佐）

補足ですが、例えば、まち歩き等のイベントで、丸博さんに御協力いただいたりしておりまして、そういったところでは連携ができているのかと思っています。

○野田委員長

デジタルアーカイブの話が出たので、丸博の中に取り組んでいけば良いのかなと思ったので、ちょっと聞いてみました。

○山口副委員長

ラボの参加者の方は、「先生たちのための10日間」のような企画は、されないのでしょうか。教員が見聞きしたことは、結果的に子どもたちの引出しを広げたり、その機会を提供することになると思いますので。美術品だったら、美術科の教員に限らず、すごく興味を持ったり、理解が深まるということがあると思うんですけれども、こういった研究に興味を持たれている教員もいらっしゃると思いますので、研究成果に触れることで、後々子どもたちも興味を示すような、文化を通した企画があると良いです。例えば、映画の研究をされていて、小学校の教員になられている方もいると思いますので、むしろ、ゆかりラボの講師にもなっていただける可能性も出てくると思います。ギャラリーツアーではなくて、教員に向けたラボの企画が立ち上げられたら、連動するのではないかと思って、提案です。

○事務局（大久保課長補佐）

ありがとうございます。ゆかりラボの研究成果について、教員への説明は普段から行っているものではないのですが、純水館を扱ったときに、教員に純水館の説明を聞いてもらい、ぜひ子どもたちにも紹介してほしいと伝えたこともあります。やはり子どもたちにもいろいろ見てもらいたいので、ゆかりの人物館では、18歳未満及び高校生以下は入館料が無料です。例えば、昨年度の「加山雄三展」の際は、東海岸小学校の児童に来てもらいました。現在開催中の大岡忠助の企画展では、小出小学校から校旗を借用しているため、児童にぜひ来館してもらえるよう、チラシの配布を依頼しました。今後もさらに発展させ、ぜひ子どもたちも関われる取組を進めていきたいと思っています。

○沼上委員

茅ヶ崎の関東大震災の研究ですが、博物館でも茅ヶ崎の「戦中・戦後のくらし」をやっていましたけど、博物館と企画の連携はあったんですか。それとは、別ですか。タイミングを近くして、別の動きだったということでございますね。北は博物館で、南でもっていう感じで。

あと、映画史ラボですが、ゆかりの人物館を曲がったところがよく映画祭の会場となって、映画を上映していました。随分前です。あそこにも映画に関わっている人がいるから、映画史を研究する中で、その会場やゆかりの人物館の建物の中で、歴代の映画なんかも上映したらすごく良いと思い言ってみました。

○事務局（大久保課長補佐）

ありがとうございます。実は映画史ラボでは、小津監督の映画の上映会を4回開催し、満員でした。沼上委員が仰るとおりで、関連する事業は、ニーズがあると実感していますので、展示の内容に合った、映

画や音楽等、連動した企画・取組を検討し、ゆかりの人物館にお越しいただくきっかけづくりを行っていきたいと思います。

○沼上委員

御存知のようにユーミンが来た喫茶店がある通り、ぜひそこら辺もお願いします。もうお店はないのですが、まだ道は残っていて、例えば、南部に山田耕筰氏の看板があるように、ユーミンが来た喫茶店があった場所とか、そういうのもね、事実あったので、他にもぜひ発掘して、お願いします。私、そこに実際行きましたから。

○栗林委員

子どもと一緒にいることからの視点でお話ができればと思っています。美術館についてですが、実は、目黒美術館は建物がすごくきれいで、子どもたちの館内ツアーを開催して、子どもたちが好きなところで鑑賞後の対話の場をもったという報告を以前に聞いたことがあります。子どもたちが絵の前に座り、円になって、「この視点で見る絵は面白い。」とか、「いろんな変化がある。」とか、「私はこれが好きだから、みんな座って話してみよう。」という発見や話ができる子ども貸切ツアーのようなものができたら良いなと思い、昨年、茅ヶ崎市美術館に話してみました。ですが、「今のところそのような機会は作れないけれど、平日は空いてるので、どうぞ御来館ください。」という趣旨のことを言われ、「でも、それでは、座れないだろう。」と思い、少しがっかりした覚えがあるので、柔軟に市民の声が届くようになったら良いと思っています。アトリエが比較的使いやすい設定になっているので、そこを皮切りに何か少し動きができたら良いなと、今考えているところです。

ゆかりの人物館については、かつて、ワークショップがあって、娘と一緒に参加しました。建物自体はすごく良かったのですが、展示に関しては、さすがに子どもたちが自分から興味を持つような展示ではなかったというのが、率直な意見です。もちろん市民に開かれているところなので、全てを子ども向けにということではないのですけれども、先ほどお話がありましたように、当事者が生きているうちに、その人たちに接してほしいという思いが強くあります。というのも、やはりコロナのときに、アプリ等を使用して、美術館のバーチャルツアーできるというようなことがありましたよね。タブレット等を用いて美術鑑賞をする経験が既に定着している子どもたちにとっては、触れられない展示物を見に行くという魅力がすごく下がっているように思っているんです。タブレットで拡大しただけで、見た気になったり、考えた気になってしまうことがすごく多いと思うのです。例えば、カメラの展示があって、仕組みを学んだり、ボタンを押してみるというような、実際の経験を持っている大人たちと子どもたちとの交流をもっと見たいです。

内輪の話になってしまうのですが、子どもが chigasaki kodomo cinemaに参加したことがありまして、あのときに本物のカメラに触れてすごく良かったといまだに思い出しています。カメラマンになりたいとか映画を撮りたいとまでは思わないけれども、またやりたいという気持ちがあったのです。常に自分も作り続けていたいとか、本物に触れたいという思いは、人間として当然にあるものなのかと思います。昔

のデジタル機器やフィルム等、今では触れないものでも、子どもたちは興味を持って触りたいと思うものなので、小さいまちの、小さい博物館ならではの、すごく魅力的なコンテンツって、まだまだ作れるような気がしています。ぜひ、うまく発展させてほしいです。

○事務局（大久保課長補佐）
　ありがとうございます。ゆかりの人物館は、多目的館も活用して、まだまだいろいろなことができると思っています。具体案はまだありませんが、今までのあり方を変え、新しい価値を作ることは、大事だと思っています。皆様の御意見や御提案をいただき、チャレンジしていきたいと思います。

○野田委員長
　今の話を聞いて思うんですけど、高齢の男性がたくさんいますから、ガジェットミュージアムのように、空き家に昭和の物をいっぱい並べて、子どもに教えてあげるということをやってみたら良いんじゃないかと思いました。

○事務局（豊原課長補佐）
　先ほど報告できなかった、文化芸術教育プログラムの美術館の取組の参加者数と相談件数について、確認しましたので、報告します。まず、「先生たちのための10日間」ですが、令和6年度は133人の教員が参加しました。相談件数に関しましては、実数は取っていませんが、相談を受け、実現可能かどうかを模索したところ、全て実現しましたので、開催件数5件が、相談件数になります。

○森井委員
　調べていただいて、ありがとうございます。133人とは、結構多いですね。相談も、1件でも、2件でも実現したら、文化芸術教育プログラムがとても素晴らしい活動になるのかと思います。ありがとうございました。

○野田委員長
　それでは、議論はこれくらいにします。プランの評価方法と各施設の事業の取組について、報告がありました。それぞれの議題について、確認していきたいと思います。
　まず、評価方法について、これでよろしいでしょうか。

○全委員
　はい。

○野田委員長

ありがとうございます。

次に各施設の事業、美術館、市民文化会館、松籟庵、ゆかりの人物館について、この内容でよろしいでしょうか。

〇全委員

はい。

〇野田委員長

ありがとうございます。確認しました。

（3）その他

今日予定していた議題は、以上ですが、その他、何かありますか。

事務局から連絡事項がございましたら、お願いします。

〇事務局（大久保課長補佐）

来年度の予定について、連絡です。5月から6月までに1回目を、7月から8月までに2回目の開催を予定しています。日時は、早めに連絡します。どうぞよろしくお願いします。

3　閉会

〇野田委員長

それでは、以上をもちまして、今日の会議を終了します。御多用の中、お集まりいただきまして、ありがとうございました。